

湖上
話

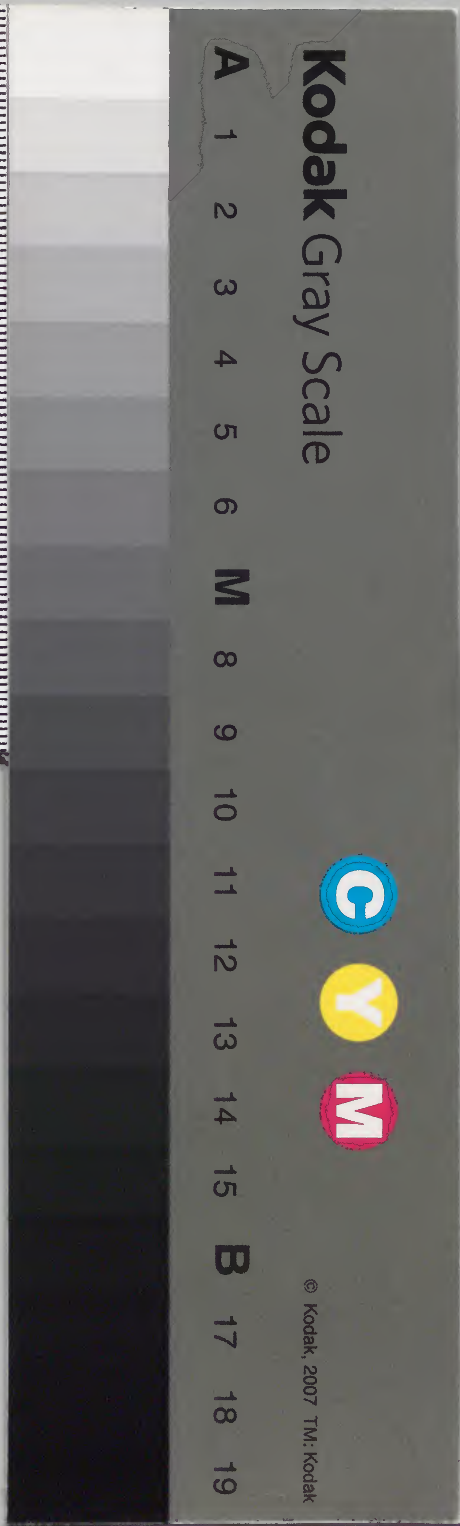
雲根志

前編

庫文閣内			
五七函	一六册	二七〇二號	和書類
三架			

庫文官政太			
一六册	一八函	二七〇二號	和書門

内閣文庫			
番號	和	11702	
冊數	16	(2)	
函號	197	97	



雲根志

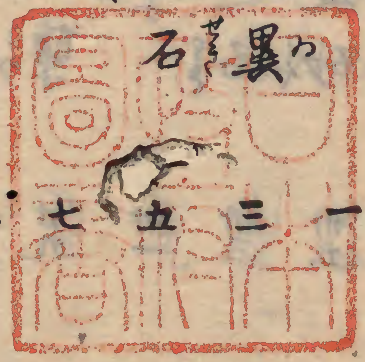
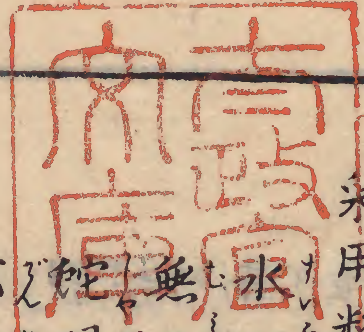
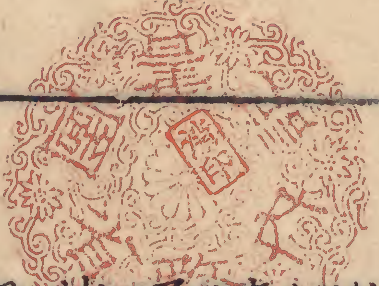
卷二

目一

卯石 滑石 石脂 文字石 磁石 玄石 無名石 水銀
 石 異石 石 炭石 磁石 蜜栗子 自然銅
 禹餘糧 滑石 石筆 石玉子 石 炭石 磁石 蜜栗子 自然銅

七 五 三 一
 七 五 三 一

六 六 四 二



雲根志卷之二目錄前編
 米用類

燒山石 附石 不灰木 自然灰 鮫唇 碁石 温石 磨砂 吸石 銀垂石

里 里 里 里 里 里 里 里 里 里

石山石 浮石 石灰礦 石塔 魚鳥腹中石 臘石 蛇骨 薰陸 燃土 山浮石

里 里 里 里 里 里 里 里 里 里

スランガステイン
空

太乙餘糧 石中黃子 硬石膏 寒水石 花菱石 孔公孽 殷孽 陽起石 南蓬砂 玄精石 紫金石

丸 里 里 里 里 里 里 里 里 里

石中黃 石膏 方解石 冷油石 石鍾乳 鵝管石 土殷孽 鳥地獄石 石硫黃 火打石 井泉石

里 里 里 里 里 里 里 里 里 里

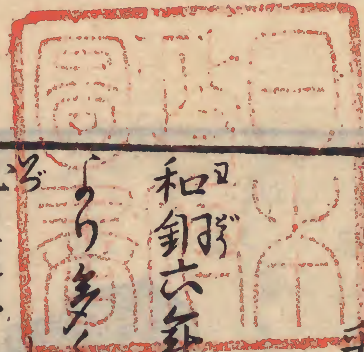
燒物茶	奎	オクリカキリ	奎
クワウルステイニ	奎	水瀧石	奎
ギヤニ	奎	金礦石	奎
銀礦石	奎	鐵礦	奎
錫鉛礦	奎	金剛石	奎
丹砂	奎	礬石	奎
膽礬	奎	鼠殺石	奎
雲母	奎	真珠	奎

雲根志卷之二

未用類

水銀

江州山田浦木内小繁重曉著述



和銅六年小水銀を教ふる事徳日本紀小見たり今云云
 出とそ自然汞也安濃津此城下も出又礦ありは石を燒
 こ水銀を取也或人松舟丹生村水銀礦と申に感是を
 る事江府田村先生紅毛玉の産冷油石と云抄を
 あり云々

自然銅 二

和産多しといふも其物何れ方金牙此種類之乎多
 公掛るといふも其物何れ方金牙此種類之乎多
 浪井戸田先生産物舎に侍前虫の産物を自然網を
 其物濃烈赤坂山小生抽稀あり至果之太なる物難
 方あり一寸四面粒を連続此物を産を磯石小似て別物



飛列金山サイヤキ
 色鉄ノ如ク黒赤
 光大サ如量

無名異 三

和名あり近江石見國より江府田村氏取寄り至果之太

茶産粒の如く外皮悪く堅く中軟くして赤出あり俗に
 て血止小用也本草及之才家等よて見り時バ怖大之又茶
 店の漢産此古法を以て茶種粒の如く

蜜栗子 四

和産和名あり近江漢産の流りも其物只法書小説形
 状を考るのそ其濃玉加肥熟石原村之宅を果持来り一石之形
 栗此如く色青黒し至堅く外皮ありて石中赤く軟あり
 栗の凡し其物何れも今予珍産を以て之を蜜栗子
 名之枕合石小似て痣なく細くなく至果之太なる物難
 其此塊あり至果之太なる物難其此塊あり至果之太なる物難
 ありや

蛇含石

五

黒色鉄丸の如し一子を盤し大なる物に桃栗れぬし小なるは
 豆粒の如し碎て石中細く之の外瘻ありたり瘻あり或は
 自然の如し振りわたりや形状殺種して和産稀に相模
 西大井川の下持淵山濃乃赤坂螺谷等にて和産産小是等次
 大蛇含中宮に居る時小舎といは非之乎葉を以て和産の
 一種なりん

磁石

六

近代本邦亦く小産の如し色黒く或は黄赤く鉄の如し是
 の如く或は赤い如く或は白く或は黒く或は赤く或は白く或は
 濃赤如く又苗木山奥列南於傳後山野に白山或は甲乃等より此
 等如く此れは尺余の劔刀を吸ぬよき物に後より一寸の針を

吸ひ纏りとて此の南を指事いへ針を以て石を磨き
 を水に浮ら小忽磨たら方南を指を磨産小若ぶるなり

玄石

七

玄石は磁石の鉄を不吸物と磁石小是なるなり産和又
 曰く和州二上山小産此の磁石と見之て昔て鐵を不吸
 物あり玄石なるなり

石炭

八

諸國小多し色黒く炭れごとく木の如く實は石之山中より
 掘りて貧民薪本より用也其の如く或は石に元某木
 れに似たる物ありなり和名多し筑前國志保にて玉石と
 して伊賀屋上産するなりウニと云をせ炭薪れ白に香を有

高山へ入る中を林をたぎりてゆかば一橋あり價貴

文字園石 土

古伝玉粟の所崎々所沖の海底に産する朝磯石の玉粟あり
文字園石と名く又古伝の青石或は鳩磯石といひり
是して赤い物あり毎年二月の十日大干涸して二十余も潮退
を著より此例ありて古伝の寺に傳ありて出で海邊に立
て鐘をよそそ鐘鐘なる間小沖へ入りておてむりて此物
此中を採りてゆかば今も此中へそいゆらるるがごとく水中小流
て石をよびて抱きよるる之鐘鐘の時の潮にさらるる石をい
ちよとて魚の陸へりてまた又奥のラガチの海中へ磯石
あり名取の是も二月の十日大潮の時は海底に沈て採るると云



石の抱大さ本まらうれし

卵石黄 十八

禹餘糧太し餘糧石中黄石中黄子号一抱うて卵石黄物
卵石黄 十八
卵石黄 十九
卵石黄 二十

禹餘糧 十九

禹餘糧 十九
禹餘糧 二十

卵石黄を足おせりゆらむびりしれしとく
石中 麵粉のじと白粉あり志せんこまけりけりし
甘一砂子下承るる抱い黄土有り或は水あり上承るる抱
白粉を介山城は太坂道橋本れ近山あり紀州徳島明
神れ渡ふまれあり
イ石とよりてこれきう上承るる介あり
レナダシゴ成ハツタイ石あり
卵抱り次よきりし

太乙禹餘糧 二十

太乙禹餘糧 二十
石等あり和名標石岩盡於石袋石あり
石中 空虚之類石中に
石等あり和名標石岩盡於石袋石あり

石等あり

いへとも大和生約山より多し一穴をいけて酒を入おくよまご
 りよふて杉石の名あり又小なる物は槌栗れどく小石を
 たくりよふて鈴石といふ大なるは水に五升を入ぬ外皮
 小石はなりつきてまぐりかこし肌養うて漆がじし
 黄六小石及ぬをたくりし物あり借机上の水入る小用也又近
 江野野山内高野山に野正の寺山又江戸白根町細川屋
 又山城山和米の松田村北山中等あり

石中黄 廿一

石中黄和産を多し禹餘糧を生むる山より多し本邦
 あり石ガゴとつし物なりよあり禹餘糧或は石中黄と禹餘
 糧は白き細き粉あり石中黄は黄く大なるり今某店より禹餘糧と

ある物おそろしは石中黄なりん

石中黄子 廿二

石中黄子ハ禹餘糧れ白粉をく水をたくりし物をし黄
 濃玉赤坂山小近生との禹餘糧を煮てけしよ多し餘糧乃
 いまい粉くちら物なり又た乙餘糧の内よ水をたくりし
 ものもなりやまを考むる是を石中黄子とまるとし
 薬にるに禹餘糧石中黄石中黄子と種ハ一類なりて別種
 あり外皮ぬんありとて丸く鶏卵の大きにるを二種
 粉の之ををたして別物と大なる物又尺或は寸余あり卵
 石黄も亦別種の物なりん

石膏 廿三

うろくそのら凝て石とるる先家れ説多し一帯おまじらよ
先家れ上より下へ出れどくろり物を持乳と一石より
よきある物い般摩子なるべし一土中より産せら物い土般摩子なる
べし山城に丸れ園観音堂のうろろは流ありけき縹緋
産せ又下野園日光山に系越最上堂に安濃志坂山より
同類は石持乳糖管石孔に摩石床石花等ありけき
持乳れ條下より出せり

土般摩 世三

土般摩は土中より産せし山芋或は薑れどく亦出り
て長きもあり中空虚なるあり実満なるありまき之葉赤
く竹の爲れどく大根牛房の形なるも有りて
救を和らり

お集めんるふかー又なりといへども月持て産所
山城玉福山山橋及箕尾山江列栗を産せし山月川村村東
難冠山月玉甲斐野川村堤田山月石紋岩孔道山橋及
石の同産水村記及野山の藤武産玉志多山王子伊勢玉
一志郡小森村の産門品之尾張玉同産物の鈴川氏予に
産せ玉の土般摩石中を産せぬき生らり又一種枝ありて
のど記実を生したるを産せり奇品なり石帯と名く是
皆同産物の産せ玉山城玉之銘寺山の麓小柳谷村の土氏時
山中より振おを俗云持乳は弘法大師封じあり石大根ありと三
石寺の什宝と記則土般摩之又伊勢玉安濃志坂山より俗
産の小枝といふ物あり形をれどく或は枝ありは實あり上

れ去股藤なり志及之の浦上産する抱花のごとく実のご
とくする抱あり

陽起石 卅三

古今和産あり白色なりて光りて花あり先尖りて狼牙のご
とくめりかれ花のごとく一葉一枚しりつきあり先年京師如蘭
先生存生の時近町の人心月廿八日に良田上不動寺へ系後せ
時大さ井のほどに陽起石の塊を拾ひ来りて予をて産上
在て見る薄産ふ少も異なるなり一葉一枚の石を以て
抱花の門人之人を化しり日給ともゆき後先生行て
たづぬ求めしりどもゆき予も又以て葉肉を求め山を登り
一里四方たづぬ見てもはぬ小塊を或人石見玉の山中掘り

ありとそ黄色れ陽起石を藏し形状薄抱し遠く見るは
予も江原石教宿金山といふ山まで黄陽起石を掘り

鳥地獄石 卅四

橋原有馬温泉より十町むろり西南山の麓より四方は尺
をぐりに小石を切て中少くもやとたるふあり其上を走る
列はらまら死せは或は俗名れ地獄と名く予先年以予
身法をきてれとくしりむらに果して志より梅ざり
是礫礫二石の心るむと人をしてけくがその内を掘せると
又一尺余り堀て下より異なる氣立てむせ例き梅るもの
は原中堂の大きなる白き粉末をふむり一ごとき石を以
せりけ石上に虫をねむるふたちまち死たり此亦よそ功

うすなるて今いたもき一六俗つふ多虫の類一六毒して
人ふはあさうらびとさう家や吾やをあらはるものち江府田村先生
初て掘らせれどもかのこくするまは掘れきとらうぬといふ

南蓬砂 卅五

宝曆十四年甲申二月廿三日濃花戸田先生の産地合し出さる
誰人のおさるも相換玉小田原の産なりとそ色白く米粒を
ふさりーとじ予も志偽いさる今の子ささるやに多く用り地

石硫黄 卅六

石硫黄徳玉徳山は産を口本の産を佳く平徳方より
集めんらよを危ことく遠く移り移り又平野佐濃
玉沙間又采子村伊豆大崎相換玉箱根奥乃今は越中立山越

後光山が火の山土依玉湯の山北嶽肥系湯系肥後阿蘇山
向玉湯伊豫道後の温泉の産玉定志うれどもは産下上
取下取あり俗小物の目負れ目火は硫黄去硫黄などいり
物の目最上之核有馬温泉上湯の花といふもの有り俗全
産一用むたれとさし抱り温泉涌出源あり是硫黄の精
るふ一越後玉小出火といふあり而性の家れ内庭の上小一の
穴ありて夜け穴より火燃おつむりより今に繋りては一登穴
れ中をんまの烟のこき氣立ち又い辺の山畑を堀小登へ燃立
夜燃火を之上硫黄の香志一とは硫黄の肥後玉阿
蘇山信濃玉沙間嶽奥乃南越地獄谷越中立山の地獄常小火
と之上熱しては硫黄の燃るるべし

玄精石 卅七

和産あるを云くは薄産茶店より多く或人珍産せる玄精石
を云くは玉大ありて石れ形状も小薄液不異なること首
尾尖り平ありて魚鱗のごとく大き一寸を七七八分白く玉を
て石中へ黒く奥は輝の産なりといふ

火打石 卅八

火打石の名産多く國々徳山或は大河等にあり色形一奇な
山嶽は鞍馬小あり色青く一頁濃は若老湯の産なり一は二
石を云くは伊賀玉種生の庄に膏茶石あり色玉を云くは
兼好法師が位居せし時小静糸の筑山へまわりしに火うち
を掃ると半は是之阿波山よりおろされは火筑後火川近

は狼川の下品之水晶石英の類もよく火をかせとも石性やわら
あて永く利ひかす一加賀式は常陸の水戸奥は輝寺れ
馬腦大より一駿河の火打坂も上あり共は本年の玉火
石の類あり

紫金石 卅九

は石山寺の什宝は式武の硯石あり常々一高山の産之
と又和名大峰山小紫金石といふものあり手先手切しり硯
石の玉品は紫色色ホしてかたうは口の中より出る石性こまり小
く上つ所の石之今まきかたうは清東清水寺湯の産小は
石よ弥院の名号をとり石塔の中に納あり何人のまきりし志也

井泉石 四十

井泉石

石見は浪山とて石餅とて形丸一大小あり外黄土小つ
之中のやりのりある白石は是を井泉石とて切疔血留小用
也とて効ありと云い其の効を井へあてり

焼山石 四十一

倭赤園と焼山とて大山あり石を出せ石の性かぐらうに
石のこり石印と用也色赤白く或は黄之赤味玉人薬材を
造り汁血或は香合を造りまゝとて灸之清石れ類あるべし

石山石 四十二

但馬玉を園と湯の間の温泉へ通入道の石をいけまは
よても新陸路も新石の名をか石とていけ所は石山とて
あり高山竹本生志きりて高山之側は大きな洞ありは洞

の奥より石をかき取りたびたど一色うすねむるる石之
近在造作の用と凡肌はなる石を自然に方形之長短厚
薄いあせども丸き石は稀くも有り大小ともに四角ありて
石工の切磨をらごとく年来は洞穴より石を採りて事
を量をかきびみ七里四方の里くへあきるよ

附石 甲三

小壺石をもちて金銀の位をいんするり其質堅小とて
用也其後玉を演奥及び松島等小ありといへども紀元
形智果は勝る事なり其格古要論の徳金石なるべし

浮石 甲四

漢名浮石和名かろしと云ふがら漆のごとく細孔あり
色白く水小入て浮べ俗にこれを以て夏の間をとかく徳石
海辺より紀伊熊野海辺薩摩の海邊等より多し又一種
山小産する相江石名宿金山小あり平光寺坊で破り
海産と異なるあり

不灰木 四十五

不灰木金く木のごとくふして実の石に化石と云ふも非
此産する木を云ふがら木のごとく色白くやわう滑
石小産する小やきを灰と云ふ故に不灰木と云はれ
石小産する小やきを灰と云ふ故に不灰木と云はれ

石灰礦 四十六

今世法に石灰を焼かすといへる石の性質かたはれ


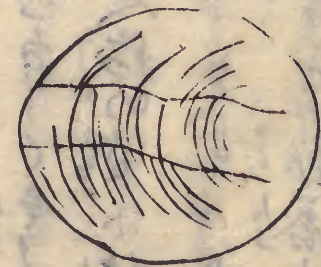
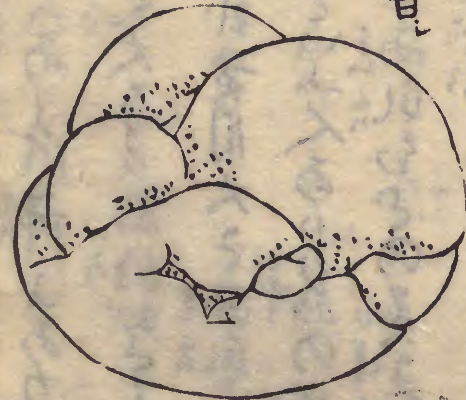
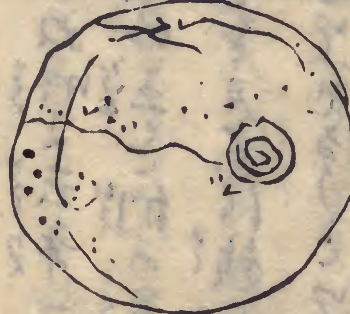
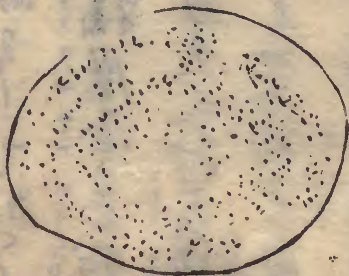


売を焼て灰と云ふも切能歩一近江玉吹山の兼婦川
のほとりに大よ出せり製すに石のほり 室暦十二年九
月これ砂りきを云ふと云ふ白くするめりたりなるる
石は
其なるも外大和石吉野石河上石安藝石若杖石肥
後玉字云はれ紫長壽村より出たり

自然灰 四十七

自然灰の類西の入口山小あり新道と新茶屋といふ村の
山之色白くやわう滑り塊をなれ刺め白粉と云ふはれ
石灰の類を和をとかく其よりふのうを和し加へ
ゆり石灰小炭と云ふなり滑石の類より油氣あり
類多し産する産する産する産する産する産する

諸獸大如圖

雲長志

<p>馬 ハサラ</p> 	<p>虎 全赤 白色</p> 
<p>羊 色白</p> 	<p>熊 蒼色</p> 
<p>獼猴 ウスイツ 三色</p> 	<p>野猪 色赤</p> 
	<p>鹿 黄褐色</p> 

雲長志

卷二

石鹽

四十八

石塩ハ山田の塩ナリ 後漢至山田飛馬元村ニあり 近江玉掛
川の凶悪ニても産モ又奥ノ山田今津小瀬月輪庄ニ大塩の里
ト云フ一村あり大山の禁ヨリテ海ニ出ルルニ遠ク一夏小大石
の如ク一穴あり石の穴より天竺ノ塩を生ク一村子
小比治を食シ海塩小具なるヲ造西郷は海ノ外ヨリ海士
モナク浦ナリ一里と古今集小志の山ヨリ出の磯ト云ル
一ノ塩出といフ塩の種多ク一里ノ下ニハナリ
獣の腹中に生ズル 抱之漢名執各依名石の尊梵名ヘイト
執各 四十九

伊勢玉は二奇石を数人谷川氏福田氏岡氏菊池氏等あり
けく、鯛魚の腹中小石と珍産を予是を凡ら小常
脾の石みて園藤より義之里と理色あり鯛魚の
と亦或人鴨の腹中小石なりとてむららば此大なる茶玉
を持ち予先年鴨を料理して腹中砂袋の中より六
葉種のものと金色の物を二粒ゆかり熟視する小
の金とて是れ事稀小ありしを後ひ小なるものに
を獣の鮫巻貝の珠の類よりむらば伊豆玉熱海を
の届中小の楚をゆりの類とむらば

基石 五十二

黑白自然の物本邦小石多し又磨して造る物あり
その白石は貝壳の自然の物に志廣谷谷志の濱小石棋子あり
一名鴉石とも云又破我島小黒棋子を産す一名鴉石と云
黒棋子を産す古俗傳云白黒石遠へ垂る夜の回小石
の鳴人鳴りやけは産黒白石ともに其次よりあゝ温るうと
山原集小破我島やまのこいり石多し又黒白まやま浦
のらぬせ又かき産をぬれ小石とけりやう石もすしらぬ能
破島の黒又鴉石の小石の白を鳥波のまののらぬ小打
を産たり又しをせや鴉石と鳥と楚をうていふし其鴉石の
をぬ又産後玉依斐此園小石の淡といふあり其所をけく
して黒白を分り出辺の童俗云思ふを白石の中にまへ

礫石一極のくちふを産のちぬふかるけを産の神のちぬふと
 太なるの概のどく小なるの豆のどく一は天威のちぬふ冷うて
 ちぬふのちぬふりるるといりそ外黒白自然の概子を於小産
 ちぬふ所多し一之河の修羅胡崎遠江玉生面於雄鯨山此
 鯨山小産石小出産去まそいま八昆崙山の昆崙石白の白洲の
 溪の白石を最上とせるとせ

礫石

五十二

むりより礫石和産あり今れ産和産較程あり山嶽の必岩
 層小産を色産白一越後山小おもぬす色之肥後馬見
 原小産を白一駿河府中に蒲萄石といふあり是礫石の一種
 なりけり石云金屋なり日光山小産を礫石の頗る可なり

温石

五十三

諸國よりおも色かたら一なり此史を以て燒病ある石を於
 あらむ石あり松津多田お羽の宮上紀石の石代若狭の竹
 村志广の石羽美濃河岐但馬等より出せ伊勢小出せハ
 ぶといふも別温石之赤若狭の岩神村志神神の境内に
 あり土俵代りの石を軟くして煖石といふ

蛇骨

五十四

蛇の骨の化せし物といふあままり之山中に産して白く骨小
 似る石之むりいハ本小ありしを去るに唐物を其内今の
 せ見出しそ沢山小おも功能たたらび大和山大峰山相
 摸出せぬ山小あり古倭切砥小用也くちとせりといふ

石をてやううく又近江英濃よりもおす

磨石 五十五

色白くやううみそておれどく麩粉のどく滑石より
たり俗にこれをてて金具をこかき刀をみぐく大和玉笠岡小
お江及中山道摺針跡ふまへは所の名産と云今れせ好
事のもの是を馬蹄粉と号せ伊豆玉あり里人けりい
去とよ相換玉十駄村奥及津軽浪乃千光寺山橋及兵
庫等小石の物あり又伊勢尾張よりあり

薰陸 五十六

色黄赤くかへ脂のどくふりて突へ石之琥珀の苗と
て説あり別抱うそ脂の化へる抱ともて漢より多く

今の世お邦も志多し是を薰る時ハ彼獣徳虫大よお
をてくそ一奥及南越の産佳あり

吸石 五十七

相換玉之浦小糸を色ある常緑の石ありけ石を破碎て
彼腫物小付り忽ち膿をまへおしてまをりら治せと云是を
てやあ刃る以下糸の雜石之腫物を用ひるるよかへり功
ありえ是俗の品類とを志しは只彼地よりて里人用ひ
けり之と蕃膏小スラガステインといふ石の下に毒一

磁石 五十八

近江玉栗を那の古申丈余の下にあり里人スクモと云
用也傳云栗を那むく栗の大樹あり方数十里よむびこ

依らうて郡の名と今探古中に梁の宮あり本あり蓋を
多ふと存りちスクモ之を黒く去のどく石のどくけり
そそよくけん耐いのころも本の葉之又越後山あり
人たぎにかく用也日本紀云天智帝七年自越後国献
土と是あり

銀垂石 五十九

三河五宝来寺近色川或ハ谷よりうをまきつこのそ
銀色の筋あり俗銀垂石といふ磯より用ひをさるん事らん

山浮石 六十

浮石和名かといふと海中の産は茶又毒一又一種山
産する物あり油産ふ是ありなり 明和元年江戶石

級の石より通山を修むる種々の石茶を引出せり
其のりち級の山金山といふ所の谷より出せり
産石とけり海産ふおもてまふりけり山の葉門老たら
ぬるに山は稀みけりと産所異なるを以て別産ふあり

カナノウル 六十一

虫物なりよく血をそそる色赤黒く鉄のこころノキ立
こころ薑子芒をれ後けり茶店の和産は似る物あり
より考といふもいまだ生物を刀尻予奥及南款より
おそくくは虫物ありなり

スラニガステ井 六十二

元来蓄産ありて何る物を辨へるべき大さるの宮のこ

くく 白雲の翅又ありて此石くがくやけり之腫物に付て
よく膿を吸と薬人云大蛇の尻又鹿皮と云 敷粒ををる
小毒くはくも云云 堅軟も異なる 出物にまびらるるは近
江府田村氏和府を見せり 二市も異なる 其功効一
ちりや否やあるは又京師の人 筋骨を揉まらめてありらふ
形状をく似たり 膿水を吸事も亦日一

燒物藥 六十三

去年江忍田上谷村粟山へ水晶雲母の類をたづみよびて
山中より石を採る 蠟石のくくは白くかきく石を採
つる薬内は百連一 男の云はセキとくくは信東のくくは
のくくすりよかけり石之燻物毎時南山へ是を拾ひて

ると又山嶽の薬田にてくくはのくくはるかけりくくは石
路の加え川よりあるは薬石ありかともくくはせきことくくは
類は玉よりありぬ一

オクリカニキリ 六十四

赤玉の物く赤人云大海老の頭中よりりと通菜之色白く
かくかくは棋子のくくは片面の中へば一大小あきごと
大碁棋子豆粒のくくはかくは異なるは今偽物あり一色
らむべ一

クハウルステイニ 六十五

費玉の抱くくはる抱をくくはくくはくくは膏薬のくくは
かりある石之長崎の薬店よりくくはくくはくくはくくは

礬石

七四

膽礬

七五

巖殺石

七六

雲母

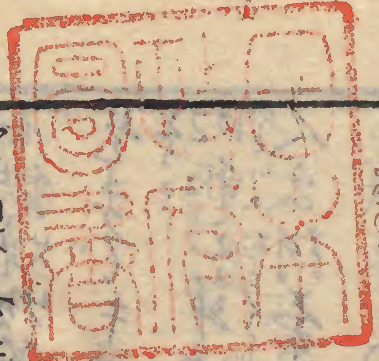
七七

真珠

七八

右十一種

和漢三才圖會を以て外傳書小載し故に之を同く采て註を省く事志す



雲根志卷之二終

